

---

# ジャパ国 超人 ベースライン 2

matsuura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジャパ国 超人 ベースライン 2

### 【Nコード】

N1715BA

### 【作者名】

m a t s u u r a

### 【あらすじ】

逃走したスーパー・カインド6号、7号を捕らえるために3号、4号、5号を惑星ライヤに派遣。  
6号、7号を追跡してマールロー地下街に入り、無事保護する。同時に、惑星ライヤの危機も解決する。同時  
天皇とケント博士の対話で話が進む。

2011.12.28 ノベリストに投稿

## 1. 現状

宇宙の反対側の極西の星界の果て惑星ライヤに、知識の避難所として建設されたシエルター・クラウンでは、順調に、科学技術や歴史などの膨大な知識をスピードオブライトのコンピューターによって、毎日、まとめ上げられ改定されている。

現在のジャパ本国が崩壊するという可能性を前提として、ジャパ国の植民星である惑星ライヤでは、国力の衰退防止のために、知識の散逸や消失を防ぐという理由で、高度な科学技術力を維持し続けなければならないのである。

惑星ライヤは、当初、10万人の植民からのスタートであったが、徐々に、シエルター・クラウンに関わらない人間が増えて、人口が500万人になり市政を引いた。

惑星ライヤは、植民後30周年を過ぎると、本国であるジャパ国との間に不協和音が聞こえ始めて来た。

ジャパ本国では、惑星ライヤの順調な発展を歓迎したが、市長やその他要職が世襲独占されないように警戒していた。

原因は、惑星ライヤ設立30周年に公布されたライヤ暦にあった。

伝説の人類発祥の星「地球」では、他国の暦を用いることは「従属の証<sup>あかし</sup>」と考えられていたので、前王朝を倒すと、その前王朝を否定するために改暦を行うのが習慣になっていたのである。

この暦は、惑星ライヤの成立をもって、開始とされる暦法である。

暦法自体は、宇宙暦法と同じである。

しかし、この暦法は、全宇宙のいかなる居住惑星の自転や公転周期にも合致していないのである。

そのうえ、ライヤ暦法では、農耕に適するように、4年に一度

閏年が設けられている。

研究者の間では、これらの点が、伝説の人類発祥の星「地球」に由来しているのではないかと考えられている。

その頃、宇宙の人類が、単一の惑星から発生した「宇宙における人類の起源の問題」を解き明かすべく、天才宇宙学者・松浦ケント博士は、研究に没頭していた。

人類発祥の惑星がどこであるかという問題に関しては、今まで科学的な根拠を持って明確にされたケースは無いのである。

惑星ライヤ・クライシス（危機）は、10年前、ケント博士によって予知されている。

しかし、一般人は、惑星ライヤを襲う危機とは何か、その全容とは、いつ起こるのか、解決策が有るのか、誰も知らない。

惑星ライヤを襲う危機の内容は、ライヤ危機対策スタッフ以外には知らされていないのである。

現時点で予測されている、惑星ライヤを襲う近未来の危機の内容に関する信憑性は高く無い。

このままの調子で惑星ライヤが前進し続ければ、本国のジャパ国と惑星ライヤの位置関係が変わる可能性もある。

そして、惑星ライヤが、ジャパ本国に対立姿勢を示すようになる可能性も高いのである。

敵は、内にありかもしれない。

宇宙の極東と極西にあるジャパ国と惑星ライヤでは距離が有り過ぎる。

通信網が発達した現代でも、よほど忠実な部下が居ない限り、惑星間の現状把握は簡単ではない。

10年前、惑星ソーラス問題が解決した後、スーパー・カインド8号は発狂し、スーパー・カインドの能力を失ってしまった。

8号は、今、ただの狂人として、惑星ライヤのメンタルホスピタルで暮らしている。

8号の発狂を目の前で見たスーパー・カインド6号と7号は、

それから3ヶ月後に二人とも姿を隠してしまった。

信頼していた松浦ケント博士も来てくれないし、8号は病院に入院している。

ジャパ国へ帰ることも許されない。

時間が経過するに連れて、6号と7号の動揺度が増してきた。

惑星ライヤに、スーパー・カインドの二人は取り残されたようで寂しかったのである。

惑星ソーラス問題で、実戦経験を持っている今の彼らスーパーカインドの力は、惑星ライヤクラスの星  
であれば、二人で征服してコントロールできる力を持っている。

## 2. ランチと幕引き

久しぶりに、極上天皇きょくじょうから松浦ケント博士にランチの招待があった。

「陛下、ランチのご招待ありがとうございます」

「ケント、体調はどうだ」

「胃の調子が、少し悪いです」

「原因は、毎日、惑星ライヤのスーパー・カインドたちのことを考えていますので」

「惑星ライヤのスーパー・カインドたちの方は、どうじゃ」

「彼らは、迎えに行かなかった私を恨んでいるでしょう。陛下」

「今、惑星ライヤの都市は、地下へと伸びつつあります」

「スーパー・カインド6号、7号も地下へ入り、自分たちの所在を不明確にしています」

「惑星ライヤの地下には、風俗の異なつた252のスマール・ワールド（小世界）が形成されていて、構造が複雑になっています」

「後から惑星ライヤへ派遣したスーパー・カインド3号、4号、5号が、6号と7号を追い駆けてプレッシャーを掛けていますので、

6号、7号は逃げるのが精一杯で反撃が出来る状態ではありません」  
「スーパー・カインドたちの各々の能力は、いかがなものか、ケン

ト」

「スーパー・カインドは、ある意味では強力兵器なので、能力順に1号から8号と番号を付けています」

「能力の高いスーパー・カインド1号、2号は、ジャパ国に留まとどっています。陛下」

「スーパー・カインド6号、7号を捕らえるのに時間が少し係り過ぎていたのではないか、ケント」

「はい、ご指摘の通り、少し時間が掛かりすぎています」

「しかし、彼らは、10年前の惑星ソーラス問題の功労者でもありますし、殺人を犯したわけではありませんので、是非、殺さずに捕まえて欲しいのです」

「私も、そう望んでいる、ケント」

「スーパー・カインド同士の意味疎通は、言葉をほとんど必要としません。その上、人の心に、ちやっぴたい紐帯という干渉をくわえることも出来るのです」

「一番望ましいのは、スーパー・カインド同士で穏やかに事を荒立てないで、マインド・ボイスを活かし「超有機体」を組織して決着を図って欲しいのです。陛下」

「スーパー・カインド3号、4号、5号は、6号、7号よりも能力が高い。その上、彼らには、相手を気絶させる機能を持つ“レイガン（光線銃）”を携帯させていますが、6号、7号は、武器を持っています」

「10年近く掛かりましたが、スーパー・カインド6号、7号は、間もなく惑星ライヤのマーロー地下街？252のスマール・ワールドに到着します。地下213階にある？252のスマール・ワールドから地上へ出るには、ハイパー・エレベーターしか方法がないのです。エレベーターの周りは、ガードマンが、24時間警備して居ますので、簡単にエレベーターには乗ることが出来ないようになっていています」

「マーロー地下街？252のスマール・ワールドへ6号、7号が入

つてしまうと、引き返すことが出来ないネズミ捕りのような構造になっ  
ていますので、後は、時間の問題です。陛下」

「時間は掛かったが、理想的な解決方法だ。ケント」

「陛下、ありがとうございます。しかし、まだ、解決しなければい  
けない問題がございます」

「どうした。ケント」

「スーパー・カインド3号、4号、5号が捕える6号、7号の扱い  
についてです」

「惑星ライヤで、彼らは、裁判に掛けられるのでしょうか。陛下」

「10年近くも逃げていたスーパー・カインド6号、7号に必要な  
のは、彼らの心身の休養である。裁判は、必要ない。ケント」

「彼らの裁判を起こさないように、手を打っておくから心配するな」

「しかし、スーパー・カインド6号、7号のメディカル・チェック  
は、必ず、実施してくれ。ケント」

「了解しました。陛下」

「惑星ライヤの危機とは、なんだったのだ。ケント」

「惑星ライヤの危機とは、スーパー・カインド8号の発狂を目的の当  
たりに見た6号、7号の惑星ライヤに対する怨念であり反逆だつた  
のです」

「惑星ライヤで、人間不信に陥ったスーパー・カインド6号、7号  
は、マインド・ボイスを使って、惑星ライヤの要人に紐帯ちゆうたいを植えつ  
ける計画を立てていました」

「彼らの紐帯計画ちゆうたいが、どうして表面化しなかったのだ。ケント」

「10年前も、今日のように、陛下からランチの招待をいただきま  
した。私は、ランチのために陛下の宮殿に来る前に、スーパー・カ  
インド3号、4号、5号を惑星ライヤへ派遣する手配をして、彼ら  
をスペース・ポートまで送ってから宮殿に参上しました」

「ジャパ国から惑星ライヤまでは、ハイパー・スペースプレーン利  
用で72日間の飛行距離です。6号、7号は、3号、4号、5号が  
ジャパ国より派遣されるのを察知して、地下に入ったのです」

「スーパー・カインド3号、4号、5号は、惑星ガイヤに着くと休む間もなく地下に入り、6号、7号の搜索を開始しました」

「惑星ライヤの地下街の構造については、3号、4号、5号に知らせてはいないのです。陛下」

「なぜ、彼らに、惑星ライヤのマーロー地下街の構造を教えてやらなかったのか、ケント」

「惑星ライヤのマーロー地下街は、入った人でないと分かりませんが、地下街全体は、地下へ地下へと下りて行く蟻地獄のような構造に設計されているのです」

「地下街へ入った者は最終的に、?252のスマール・ワールドへ行くようになっていきますので、前もって、追い駆ける側のスーパー・カインド3号、4号、5号に惑星ライヤの地下街の構造を教えて、彼らに油断がいき、作戦が失敗するのを恐れたのです。陛下」

「どうやら、惑星ライヤの危機も回避したようだな。ケント」

「はい、そうです。惑星ライヤの危機は、もう4、5日すれば解決します。陛下」

「しかし、暗黒時代は、まだ、始まったばかりです」

「それがどうした。ケント」

「暗黒時代が、何を求めてどの方向に向かって進んでいるのかが問題なのです。陛下」

「暗黒時代の向かっている方向は、分からないのか。ケント」

「宇宙で、今、科学と経済が順調に発展しているのは、ジャパ国と惑星ライヤだけだと言っても過言ではありません。他の国や惑星は、科学や経済の停滞や野蛮化の方向に向かっています」

「ですから、ジャパ国と惑星ライヤの間に引かれたライン上で、事件が起こる可能性が高いのです。事件から戦争に発展することもあります。陛下」

「事件の起こる具体的な場所は、分からないのか。ケント」

「現段階では、ライン上としか観測できません。もう少し経てば、詳しいことがご報告できると思います。陛下」と言って、陛下に丁

寧に挨拶をして、ケントは宮殿を辞した。

それから三日後、惑星ライヤのマーロー地下街？252のスマール・タウンで、スーパー・カインド<sup>3</sup>

号、4号、5号によって、6号、7号が無事保護されたのである。

松浦ケント博士と連絡を取りながら、博士の指示を受けて、惑星ライヤで一週間休息してから、彼らがジャパ国に帰って来た。

そして、「惑星ライヤの危機」は、幕引きとなったのである。了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1715ba/>

---

ジャパ国 超人 ベースライン 2

2012年1月4日11時46分発行